

【スイス】うまく馴染んだイスラム、敵対の芽も

イスラム教徒は目立ってはいけない存在、女性蔑視との反感も

中東生

2015年03月07日

ソーシャルリンクをとばして、このページの本文エリアへ

パリ連続テロ事件はスイスにも大きな衝撃を与えた。しかし、一般的スイス人の中で暮らしていると、どうしても「対岸の火事」的な印象が拭えない。町中には「je suis Charlie」の貼り紙が見られるが、スタイリッシュにきまり過ぎていて、どうも違和感がある。

シェンゲン協定によって簡素化されるようになった国境でのパスポートコントロールが、また行われるようになったとか、街で警官の姿を見かける機会が多少増えたとか、その程度の変化しか感じられない。近隣諸国では、「現在ヨーロッパで唯一のイスラム国テロフリーな国」と謳われるスイスの実態を調べてみた。



反イスラム感情の高まりを感じる、と語るアホ

メッド・サダガット氏

スイスにおけるイスラム教徒の歴史は10世紀にまで遡る。スイスの山岳

地帯であるヴァレー州に居住し、アルプス越えに重要な聖ベルナル峠やザンクト・ガレンを統治していた時期を経ても、20世紀に至るまでイスラム教信仰の組織的な活動はしていなかった。

1950年から1960年代、スイス在住イスラム教徒といえば、ジュネーヴに駐在する外交官か、サウジアラビアの富裕層である旅行者くらいであったという。彼らの寄付により、1963年スイス初のアフマディーヤのモスクがチューリッヒ市内に建設され、現在も住宅街の大通り沿いに鎮座している。

その後1970年代から本格的移民が始まり、ユーゴ紛争などを受け80年～90年代にイスラム教徒が急増し、イスラム教徒＝社会的弱者という図式が出来上がった。彼らは主に旧ユーゴスラビアとトルコから移住しており、アラビア諸国からのイスラム教徒が多いパリとは性質が異なっている。アラビア諸国のイスラム教徒が彼らの共同社会を大切にすると比べて、ユーゴスラビアなどバルカン半島のイスラム教徒はプライベートを尊重し、集団としての活動はあまり見られないという。

2007年、ベルン市議会が却下した、ヨーロッパ最大級のイスラム文化センター建設計画は記憶に新しい。その後2009年11月の国民投票では、ミナレット（イスラム教のモスクに付随し、礼拝時刻を知らせる塔）の新規建設の禁止が、57.5%で決定された。その背景について、ベルン大学イスラム研究科長のラインハルト・シュルツェ教授にお話をうかがった。

「理由として次の3点が挙げられます。まず、スイス人にとって、イスラム教徒は目立ってはいけない存在で、天にそびえるミナレットや、視覚的に違和感を与えるヒジャブに関しては、否定的です。第二にイスラム教＝女性蔑視という図式が存在しており、それに反対する左翼がイスラム教を牽制しているという背景もあります。最後に、これはスイス人独特の性質に起因しているのですが、州議会、連邦議会とスミーズに可決された案件に関して、『国民の声を聞かせてやろう』と、世論がわざわざ反対の方向へ向かう傾向があるのです。その結果、今回のように、可決秒読みとされていたイスラム文化センター建設計画は否決されたのです。しかしそれによるしこりなどは現在に至るまで感じられません」

2009年のミナレット新規建設禁止によって新しいミナレットは建てられなくなったが、前述のアフマディーヤのモスク、サウジアラビア資金によって1978年、ジュネーヴに建設されたモスク、チューリッヒ近郊のヴィンタートウールのモスクと、永年の議論の末に建設されたヴァンゲン・バイ・オルテンのモスクの4カ所にあるミナレットは存在し続けている。

政治的に見ると、右よりのスイス国民党（SVP）が反イスラムの姿勢を取っているが、あくまで政治的戦略であり、社会的なテーマで反イスラムが全面に出る事はない。それは、イスラム教徒が、特にライン川上流の小さな村などに、上手に馴染んで暮らしているからだと言っているシュルツェ教授は語る。「ド

イツやスウェーデン、デンマークのように特別なイスラムゲッターがある国で見られる問題は、スイスでは全くと言っていいほどない」のだという。



🔍 スイスのミナレット　イスラム教の象徴だ

しかし、イスラム社会からの視点は全く別物だった。前述のスイス初のモスクの指導者、アホメッド・サダガット氏の語るイスラム社会の現状は厳しい。

「2009年のミナレット新規建設禁止法あたりから、反イスラム感情が煽られていると感じていました。フルムスにあるモスクが放火されたり、平和を謳ったパンフレットが破られて送り返されたりしたこともありましたが、パリ連続テロの後には頂点に達し、モスク前の看板にスプレーでいたずら書きをされたり、非常な攻撃性を感じました」

「隣国などではミナレット新規建設禁止などは存在しません。ティチーノ州で可決されたブルカ（目以外を覆う被り物）禁止令をスイス全国に広げようとしている政策も、他国では見られないことから、スイスの状況は他よりも厳しいと感じます」

サダカット氏は、それを現在発展を続けているイスラム教への政治的牽制と理解しているという。そしてそれが継続することによって、真の敵対心が生まれることを心底恐れているという。

このスイス社会の表向きの平和と、イスラム社会が抱える危機感のギャップこそは、まさしくスイス的だと言える。直接民主主義によって、スイス人の要望が反映される社会。それは、理不尽とも思える法案の可決を許す。これがスイス人の許容できる「共生」なのだろう。

[Global Press のサイトはこちら](#)

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.